

会報 No.331



キャリア・コンサルタント

2022年（令和4年）9月号

9月20日発行

[発行] キャリア・コンサルタント協同組合

発行責任者：渡邊 健三

〒102-0052 東京都千代田区神田小川町 1-8-3

小川町北ビル 8F

TEL：03-3256-4167（代表）

直通電話：営業本部 03-6821-7544

：外国人材受入事業部

03-6826-7789

FAX：03-3256-4168

E-mail：[事務局] jimukyoku@ccco.jp

[営業本部] eigyo@ccco.jp

URL：<https://ccco.tokyo>

<http://ccco.jp>

編集長：山本奈美

編集者：大野長壽 中野 忠 福田秀樹

バックナンバー：

<http://www.ccco.jp.shosiki.kaiho.html>

1. 寂しくなるなー。田中努さん！

理事長 渡邊 健三

2. 田中努さんのこと

顧問 栩木 義彦

3. 田中努さんお世話になりました

監事(組合員) 中野 忠

(健康管理 13)

4. 病気は薬で治せるか？

常任理事 宮坂 武彦

(記憶に残る西部劇 その10)

5. 「燃える平原児 Flaming Star 1960」

元日立ビルエンジニアリング 常務 小泉 幾多郎

(しごとの落とし文 第3回)

6. 福島工場と会社整理

田園 中児

7. 事務局だより

事務局

一粒万倍

1.寂しくなるなー。田中努さん！

理事長 渡邊 健三

ペンネーム田園中児で知られる田中努さんが2022年8月23日に交通事故で亡くなりました。私は、その日の夕方5時過ぎに事務局で帰り支度をしていた田中さんに、「帰るの?」「そう、帰る」「気をつけて帰ってね」と言って別れたのが最後でした。

田中さんには長年事務局長をやっていただき、CCKの存続の危機は何回かありましたが、そのたびに何とか乗り切り、現在のCCKに至っています。大変なご苦労をおかけしましたが、反面、田中さんはそうした場面を楽しんでいたようにも思います。なかなか常人ではできないことです。ここ数年、CCKの決算は大幅に改善しましたが、この礎を作っていたいただいたものと田中さんに大変感謝しております。

思い出としては、話し出したらとまらないエロ話、小話、鉄道、そして会議に関係ない思いつき話など、いつころの話かと思うほど多種多様な知恵袋・保存袋を持った、今の時代には希少な面白い人でした。だんだん昭和の時代は遠くなります。

最近では、組合の研修会、忘年会で飲む酒の量が少なくなってきたのが印象的でしたが、そうした集まりは好きな方でした。飲んでも飲まれるということがなく、楽しい酒飲み男でした。

今頃は、あの世で好きな酒をちびちび飲みながら、だれかと昔話、若い頃の思い出話、戦争中の話、CCKの話などで盛り上がっていることでしょう。

今までありがとうございました。お疲れさまでした。

2. 田中努さんのこと

顧問 榎木 義彦

その日（8月18日）久しぶりに彼とCCKで顔を合わせた。

2人は昭和11年（1936年）の生まれで85才を過ぎ持病もあることから、CCKに来ることも週に2回程度になり、しかも彼は午後に来ることが多いのに対し私は原則10時から3時にしているため、顔を合わせる事が少なくなっていた。

この日は久しぶりに会ったので、「最近ご機嫌はいかが。」と冗談半分に聞くと持って来た杖を見せて、「大分歩くのがきつくなったので、とうとうこれの御厄介になったよ。それに持病のこともあるので近々介護保険の申請をしようと思っている。あんたの方はどうなの。」というので、「お蔭様でまだそこまでは行っていない。持病の関節リュウマチのせいで多少不自由はあるが、ぎりぎりまで頑張ってみようと思って、可能な限り自力でやってみるつもりだ。」ということで、最近話題になっていること等雑談をしてその場は終わった。

午後3時になり、私はいつものとおりにコーヒータイムの途中で失礼したが、そのとき「気をつけて帰れよ。」と言うと、「お互いにな。」というこたえで別れた。まさかその数時間後に恐ろしいことが起こることなど予想もしないで。

翌19日早朝わが家の電話がなった。「田中の家内ですが、昨日主人が事故で亡くなりました。CCKの方にお知らせしようと思ったのですが、CCKで私が面識のあるのは榎木さんなのでまずはお電話致しました。」という奥さんの声に、「昨日私と元気で話されていたのに信じられません。どうなったのですか。」とかがうと、自宅（川崎市宮前区）の近くの道路を渡ろうとして車にはねられたということで、ほとんど即死の状態だったとのこと。という返事、「昨日別れるときには普通に話をしていたのに。」とすぐには次の言葉が出なかった。とりあえず「ご愁傷様でした。突然のことでいろいろ大変だと思いますが、奥様もお身体にお気をつけ下さい。」というのが精一杯で電話を切った。

まずは渡邊理事長他CCKで親交が深かったと思われる方に電話で連絡したが、皆さん一様に大いに驚かれたのは言うまでもない。

思えば彼とのお付き合いは平成8年に任意団体だったCCA（その時点でCCKはCCA会員の有志10名程度が出資する組織内組織で、新規加入者は全員CCAに加入した）に入った時からであるから、足掛け26年にもなる。振り返るとずいぶん長い付き合いだったと思う。

彼との付き合いは、まず彼のCCAに対する不平・不満を承ることから始まった。当時CCAには、もう一人田中姓の人がいてこの人も努さんに負けず劣らず不満居士だったため、当時理事長だった私はご意見拝聴のためずいぶん多くの時間を割いたのを覚えている。意見の内容は、会の運営が不明朗なこと未来に向けてのビジョンが乏しいというものが多かったと思う。

私の最初の理事長はCCK発足の平成7年8月から8年5月の総会までの1年弱で、その後家内の体調がすぐれなかったため再任を辞退し、以降は理事には留まったものの大した仕事が出来ず、CCA内の一部の仕事を担当したにすぎない

ため、彼との接点も少なくなっていたが、平成14年になって家内の健康状態も落ち着いてきたので、CCA(というよりもCCK)の仕事にも積極的に取り組むこととした。

その時既に事務局長になっていた彼とは今度は総論ではなく、各論で意見を交わすことになったが、その第1段は「営業本部」の設置である。当時CCKは営業活動を全く行っておらず、電話等によるコンサルティングの依頼と会員の紹介による案件が主体であり、CCKを含むCCAの収入の大半は会員の会費(CCK加入者は賦課金)に頼っていたため、収支はかなり厳しい状態にあったが当時理事の大半はコンサルタント本流を自認する人たちで、「コンサルタントの仕事は頭を下げて頂くものではない。組織が認知されれば、黙っていても仕事は来る。」「営業するような世俗な組織にはしたくない。」と理屈にもならない主張が多かったため、ほとんど営業活動が行われていない状況であった。

私が理事会で「営業本部設置」の提案は、なかなか支持が得られず苦労したが、当時の赤井理事長のとりなしで何とか設置にこぎつけたが、それを支えてくれたのが事務局長としてCCAの経理担当の立場で苦労していた彼であった。

スタート時に私ひとりであった「営業本部」はその後加入された竹内さん、大迫さん等の協力が得られて組織として活動できるようになったが、そこまでの間も、またその後においても彼の協力が大きかった。

次に彼との協力で達成できたのが、外国人研修生(現在は実習生)の受入事業の実施である。コンサルタントの本流を自認する人たちからは、当然のことながら「コンサルタントの集団がそんな場違いなものを使うべきではない。」とか、「初めてのことでトラブルが起きないか心配。」等の意見が出て難航を極めたが、提案者の篠田氏・渡邊氏(現理事長)と共に粘り強く説得を続け、1年がかりで実施にこぎつけたが、その中でも事務局長として細かい点で対応してくれた彼の働きが欠かせなかった。

もう一つ忘れられないのが、CCAの活動をCCKに一元化するよう提案したことである。営業活動もある程度効果が出始めていたが、その時にはCCAの収支はかなり悪化して「場合によっては組織の解散も」ということがささやかれた時期なので、事業を主体とするCCKを軸に組織を一本化して巻き返しを図ろうとした提案であったが、これについてもCCAを本丸とする考え方を持つ人からは、「CCAあつてのCCKだろ。本末転倒だ。」とか、「事業を主体とするCCKが中心となれば、設立以来のCCAの重要な役割である会員の親和が保てなくなる。」等の意見が多かったが、その頃の新規加入者の中には最初からCCK加入を希望する人も徐々に増えつつあったこともあり、彼と共に各理事を主体にその意義の徹底と指示を取り付ける努力をした結果、以前ほどの強い抵抗はなく、平成18年にCCKに一本化し、今後ともCCKの組合員になることを望まない人はCCKの賛助会員になってもらうことで、一本化が実現した。

いくつかの彼との協調で達成したことがあった反面、2人の意見が全く対立したことがある。それはCCKの決算対策に関することであった。先にも記したように、CCK一本化した時点の収支は実質的にかなり悪化しているはずであったが、どういうわけかCCKの決算書は毎年黒字になっていた。

これは彼が「赤字企業だと仕事の新規契約・金融機関からの借入等で不利になる。」と彼が判断して、善意からそれを続けていたものであったが、当時理事長であった私が「この状態を長く続けなければいずれ破たんを来す。」との判断で潜在赤字を全てさらけ出すことを理事会に諮り、半ば強引に当時約 200 万円あった潜在的な損失を平成 23 年度の決算書に計上し、CCK は一気に赤字企業に転落した。

彼はこのことで、「中小企業の経営を知らない人がやることだ。」「これで新規の加入者も減るし、銀行等の信頼も大幅に落ちるからもうおしまいだ。」私を責め続けたが、幸い営業活動の成果が少しずつ実って来たことと、渡邊さんたちの外国人実習生の受入事業が軌道に乗ったこと、組合員の新規も増えたことから売上収益とも徐々に回復し、理事長を渡邊さんに引き継いだ平成 26 年後は更に回復が加速し、現在は黒字企業になっていることは皆さんよく御存じのとおりである。彼の怒りもそれにつれて収まったことは言うまでもない。

その他にも彼との思い出は筆舌に尽くせないほどあるが、この辺までとし彼のご冥福を心より祈って、まとめとしたい。

3. 田中努さんお世話になりました

監事(組合員) 中野 忠

田中努顧問の突然の死去の報に触れ大変驚いています。田中さんとは事務局の補助的なお手伝いをさせていただきました。たまたま私の兄と同じ昭和 11 年生まれということで、話題を合わせた話をしましたし、なによりも同じ慶應の先輩でしかも鉄道好きということで、田中さんから鉄道話題の本を 3 冊お借りしていたのですが、まだ読み切っていない本もあり 1 冊しか返していませんでした。

慶應の話題では、毎年 10 月の日曜日に 0B の同窓会的な集まりの会である連合三田会大会が開かれ、各サークルの 0B 同士が集まって飲食で懇親を深める席に田中さんがワンダーフォーゲル部の席で楽しそうに飲食している席に一度お邪魔したことがありました。

鉄道では私が幼年期の戦後まもない時代の話題をよくお聞きしましたし、一度研修の集いで鉄道談義をしようと持ちかけられ、同じ鉄道好きの榎木さんと 3 人で話したこともありました。今年の 3 月の JR 改正では田中さんからこの話題で会報の出筆を頼まれたり、鉄道の話題は事つきませんでした。従って、いつでも鉄道の話題で楽しみにしていたのですが、残念でなりません。

また田中さんは、最近の会報に戦時中に過ごされた疎開時代の話に始まり慶應での高校・大学時代のこと、最初に就職した山一証券時代から 8 月号ではプラスチック加工会社のことなど掲載されていました。今回遺作が掲載されるとのことですが、その次も楽しみにしていたのですが、まさかの交通事故で急逝され続けられなくなったことは本当に無念なことだと思います。

田中さん本当にお世話になりました。

以上

4. 「病気は薬で治せるか？」

常務理事 事務局長 宮坂 武彦

今回は、病気と薬の関係、薬がもたらす各種の弊害（副作用）について考えてみたいと思います。日本においては、熱が出る・頭痛がある・下痢や便秘になるなどの体に不具合が生じた時には、病院に行って薬を処方してもらうことが通常に行われております。欧米では風邪で受診しても、「1週間ほど安静にしてそれでも熱が下がらないようだとまた来てください。」と薬の処方がない国もあるといえます。

つまり、日本では、薬信仰が根強く、「症状の発症→病院への受診→薬の処方＝良医」となり、「薬の処方なし→診療拒否＝やぶ医者」との考えが強いように見受けられます。

薬に対しては、以下のようにとらえているように思われます。

- ・薬は体にいいものだと思っていた。
- ・薬で病気が治ると思っていた。
- ・薬はずっと飲み続けるものと思っていた。
- ・薬の副作用はめったに起こらないと思っていた。
- ・そもそも副作用がある薬を医者は処方しないと思っていた。
- ・市販薬には副作用がないと思っていた。

しかし、薬は一種又は数種の化学物質で構成されており、基本的には毒として作用するものであり、人体を維持するため細胞レベルや臓器レベルで複雑な化学反応を繰り返しているため、薬は主病巣にのみ作用するのではなく、細胞等の身体維持作用にも悪影響を与えるものと考えられます。

もちろん、救急医療等において薬剤が効果を示し重篤な症状の患者さんの命を救うことも多々ありますが、風邪薬、便秘薬、降圧剤、コレステロール低下剤、血糖低下剤等の慢性疾患については、以下のような弊害（副作用）が生じます。

1. 依存が生ずること

身体に本来備わっている諸機能にさぼり癖が付き、排便・睡眠等が薬でしか機能しないようになり、薬への依存性が生じます。

2. 耐性が生ずること

薬を服用し続けると、体が薬の解毒作用に慣れてくるせいか、薬の効果が生じにくくなり増量や他の効果の高い薬に変えないと薬の効果が得られなくなります。

3. 免疫力が低下すること

免疫力を低下させる薬剤が多々あり、感染症やがんになりやすくなり、ひいては寿命を短くすることになります。

4. 激的な副作用が生じること

頻度は少ないものの病院の処方薬のみでなく市販薬でもスティーブンスジョンソン症候群（*1）やアナフィラキシー（*2）を生じ、最悪の場合死に至ることがあります。

5. 対症療法であること

ほとんどの薬は発症の根本原因を正すのではなく、体に生じた症状を緩和するもので、薬の服用をやめれば元の症状をぶり返します。つまり、発熱に伴う解熱剤の投与は、発熱の根本原因であるウイルスや細菌を殺すのではなく、単に熱を下げる効果しかありません。

次回以降では、具体的な薬剤の効能・効果や人体への作用・副作用などについて検討してみたいと思います。

- * 1. スティーブンスジョンソン症候群（SJS；皮膚粘膜眼症候群）とは、初期症状が発熱や喉の痛みなど風邪の引き始めとよく似ているので、SJS と診断されずに重症化を招き、失明などの後遺症が残ることや死亡することもある病態を言います。1922年に医師スティーブンスとジョンソンにより報告された病態であり、決して新しいものではありません。
- * 2. アナフィラキシーとは、薬剤の服用や特定の飲食物の摂取等により引き起こされる病態で、じんましん・赤み・かゆみなどの皮膚症状、唇や舌の腫れ・瞼の晴れなどの粘膜症状、息切れ・咳などの呼吸器症状あるいは血圧の低下、卒倒などの症状を伴い、最悪の場合には死に至ることもあります。

(記憶に残る西部劇 その10)

5. 「燃える平原児 Flaming Star 1960」

元日立ビルエンジニアリング 常務 小泉 幾多郎

9月号の西部劇ですが、2022年7月に「エルヴィス Elvis 2020」が劇場公開され、8月12日BSPで、エルヴィス主演の西部劇「燃える平原児 1960」が放映されました。両者につき書いてみました。

今年の7月映画「エルヴィス Elvis 2022」が公開され、久しぶりに映画館で映画を観た。ご存知エルヴィス・プレスリー(1935-1977)のアメリカンドリームの光と影の伝説をバズ・ラーマン監督が、華麗なるミュージカル映像で蘇らせた。エルヴィスを演じたのは、オースティン・バトラー。殆んどエルヴィスになり切っているが、ボイス・トレーニング等役作りに2年を費やしたとのこと。「ボヘミアン・ラプソディ 2018」での主演ラミ・マレッタにフレディ・マーキュリーを完全にコピーさせたポリ・ベネットがムーヴメント・コーチとして、振り付けを担当したこともあり、動きがエルヴィスと同体化したようだ。監督は、エルヴィスの若い頃は、バトラーの歌と晩年はエルヴィス自身の歌と両方を巧みに使用した。また強欲なマネージャートム・パーカーを名優トム・ハンクスが、あくどい語り部として演じさせている。当時、エルヴィスに、それ程熱狂した訳ではないが、今回この映画を観て、その魅力に魅かれた感じ。

映画の熱気が冷めない8月、NHKBSPで、エルヴィス・プレスリー主演の西部劇「燃える平原児 Flaming Star 1960」が放映された。歌手としての名声が呼び戻ったが、映画出演も生涯33本にも及んでいる。本人は当初演技派を目指し、映画内の歌には興味がなかったというが、制作する方は、ミュージカル風の明るい青春映画で挿入歌付きのもの「GIブルース 1960」「ブルーハワイ 1961」「ラスベガス万歳 1963」や「エルヴィスオンステージ 1970」「エルヴィスオンツアー1972」等といったコンサートのドキュメンタリー的に記録したものが多かった。しかし出演した西部劇3本「やさしく愛して 1956」「燃える平原児 1960」「殺し屋の烙印 1969」は歌よりも演技に力が入っているのだった。特にこの映画は、あのクリント・イーストウッドを開眼させた

「ダーティ・ハリー1971」の監督ドン・シーゲルの作品らしく、硬派な作りで、無駄のない構図と編集で緊張感がみなぎる。白人の父、カイオワインディアンの母から生まれ、両方の血を受けた次男ベイサー(エルヴィス・プレスリー)の葛藤と覚悟を人情劇というよりも、根深い差別をテーマにしたアイデンティティという視点で描いている。一家の長としての存在感を示す父バートンをジョン・マッキンタイヤ、インディアンの母ネディをメキシコの大女優ドロレス・デル・リオ、白人の前妻との長男クリントをあのだナ・アンドリュースの弟スティーヴ・フォレストとその婚約者ロズリンをバーバラ・イーデンと脇役陣を演技派で固めている。イントロの長男クリントの華やかな誕生パーティシーンから一転、隣家がインディアンに襲われるシーンは白人の頭を打ち割る、火矢で家屋が

炎上する。タイトルから流れる主題歌 Flaming star とパーティでギター片手に唄うカントリー・ウエスタン調の曲のみがエルヴィスの歌唱で、俳優業に専念したいという意思の表れがその演技の中に表れている。酋長が白人との戦いを決意したバッファロー・ホーン（ロドルフォ・アコスタ）に代ったことから、白人とカイオワ族との和平を探るべく、ペイサーと母ネディが部落へ出向き折衝するも不調、その帰り、白人に母が撃たれるも、医師の派遣を拒んだ白人たちをペイサーは恨むことになる。

また父バートンは一人牛を運ぶ途次、酋長の意に逆らったカイオワ族の戦士たちに撃たれてしまう。母の仇として白人を憎み、父の仇としてインディアンを憎んだ男が最後には、白人の兄への希望を託し、インディアンの伝承通り死んで行く。原名 Flaming Star 光り輝く星とは、インディアンは死を迎えるときに輝く星を見るという言い伝えから来ており、母親も、ペイサーも輝く星を見たことで死んで行く。白人と結婚したことで同族からも蔑視された母親。ペイサー最後のセリフ、「いつか偏見のない時代が来る筈だ。死の星が迎えるのを見た。丘へ行って死ぬよ。」この映画を観ていて、白人とインディアン両者の立場を公平に描いている点は評価するが、どうしても、善悪どちらの肩を持つのか、出来ないのは辛い。スッキリしないのだ。エルヴィスとしては、人種間の誤解や不寛容さに若者特有の悲しみをたたえた表情で苦悩する青年を渾身の演技で表現していたと言えるのではなかろうか。

6. 福島工場と会社整理

田園 中児

昭和57年（1982年）11月27日（日）の早朝、友人からの電話で起こされた。それは「日本経済新聞」「福島民報」「福島民友」各紙に「新幹線工場を運ぶ」と題しN成型工業をはじめとした15企業が工業団地協同組合を結成し、福島県南の白河市に隣接する「中島村」に集団引っ越しをするというスクープ記事であった。当時の年齢は35歳であった

確かに、中島村とは話が進んでいたが、決定ではなく計画の段階であった。進出企業も確定されておらず、中島村による一方的な発信であった。それが福島県を初め、福島県中小企業団体中央会郡山支部や白河商工労政事務所に知られるところとなり、「中島村工業団地協同組合」を設立することになった。N成型工業の役員会でも積極的に行動することに決議がなされた。中島村は福島県の中通りの県南で白河市の経済圏である。交通の足は新幹線の「新白河駅」（旧西郷駅）より車で約30分、バスは本数が少ないが矢吹駅からの便がある。白河近辺の市町村を訪問したが中島村が工場誘致に一番熱心であった。

一方、得意先の動向として、C社は工場を新白河に移し、T社は音響工場を青森県五所川原の子会社に生産を委託、S社はK社と合併し福島県南の棚倉に工場を新設した。また、東北地方では電気メーカーの製造拠点多く存在していた。

その為、中島村での工場建設が急がれた。しかし、資金は潤沢ではなく横浜工場の売却、商社である兄弟会社のT産業からの支援、本社工場の売却と次第に身を削る状態であった。仮工場の開設による経理と品質管理者の教育を急ぎ、本社は借事務所に移転、昭和61年（1986年）1月21日によりやく工場の全面操業開始に漕ぎ付け「落成式」を迎えることが出来た。

しかし、昨昭和60年のいわゆるプラザ合意により、受注は下降線をたどり、工場は落成したものの業績は上がらず、コンサルタントによって役員の考え方を聞き出すと悲観的であった。中島村には専務が常駐していろいろと段取りをつけてくれたが、福島への工場進出は失敗であるとの考え方に達した。

61年10月得意先と下請け及び従業員を引き受けてくれる企業が現れ、工場の土地及び建物と中島村の自宅を売却することにした。当時はまだ「M&A」という概念はなく、かなり安く手放した。中島村の関係者からは「夜逃げ」と揶揄され、むなしい思いで撤退した。その後所要で工場に立ち寄ると、「N成型工業福島工場」の看板が、「T工業白河工場」と書き換えられたのを目の当たりにして一入、惜別の念に襲われた。

工場の売却と引き渡しを終了した後は、発行した手形の回収とジャンプの依頼に追われ、敗者の惨めさを感じた。朝早く家を出たものの行く先は頭を下げるお願いだけであった。

7. 事務局だより

事務局

●8月16日の理事会で次の新規加入の組合員が承認されました。

Happy&Life88 合同会社 千葉県市原市 代表者小俣義晴 紹介者：岡崎充徳氏

●今まで会報を毎月発行してまいりましたが、今後は年4回（3月・6月・9月・12月）に変更させていただきます。

●9月の行事予定

7日（水）貿易実務配信（13：00）

13日（火）運営会議（13：00）

14日（水）営担会議（10：30）、貿易実務配信（13：00）

20日（火）理事会（13：00）

28日（水）営担会議（10：30）

●10月の行事予定

11日（火）運営会議（10：30）

12日（水）営担会議（10：30）

18日（火）理事会（13：00）、研修の集い（15：00）

26日（水）営担会議（10：30）、貿易実務配信（13：00）

●11月の行事予定

2日（水）貿易実務配信（13：00）

8日（火）運営会議（10：30）

9日（水）営担会議（10：30）

15日（火）理事会（13：00）

24日（木）営担会議（10：30）*第4水曜日が祝日のため

▼田中努顧問が8月18日、CCKからの帰り、交通事故で亡くなられました。このため、今回は田中さんを忍んでの追悼号となりました。田中さんは長らくCCKの理事を務められ、事務局長としてCCKのために尽くされてきました。特にこの会報の作成には情熱を燃やし、毎月会報が発行できたのも、田中さんのおかげです。田中さんは会報で自伝を掲載していて、8月号はプラスチック会社時代のことに触れその会社整理を行うことで終わり、(つづく)となっていました。ところが、その会社整理のことを記した文章が残されていたので、遺作として掲載しました。今後の会報は季刊発行となりますが、田中さん長らく編集長としてよい会報を作成くださいましてありがとうございました。

▼9月8日イギリスのエリザベス女王が死去されました。96才でした。女王は70年もの間国家元首に君臨されてきました。昭和天皇が亡くなられた際、62年という在籍期間に驚いたものですが、エリザベス女王はそれよりはるかに長い期間であったわけです。その昭和天皇は1971年に渡英、エリザベス女王は1975年に来日された事を思い出します。謹んで哀悼の意を表します。

▼今月27日安部元首相の国葬が行われます。この国葬については賛否両論があり、世論の情勢では反対が賛成を少し上回っているようです。国家元首であったエリザベス女王の国葬と比較するとどうなのかと疑問を感じ得ません。それでも憲政史上最長の在任期間と悲劇的な最期を鑑みるとやむを得ないのかとも思われます。ともかく混乱なく無事行われるか見守りましょう。

編集後記：

田中さんがご逝去されましたことを受け、あと数回予定されておりました「しごとの落とし文」は今月号をもちまして最終となります。

引く続き皆様のご寄稿をお待ちしております。